慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九世紀マラッカ海峡檳榔嶋史略 : 海峡植民地における多民族社会の形成過程
Sub Title	The 19th-century Penang in the Straits of Malacca : a case of the multi-ethnic society in the straits settlements
Author	重松, 伸司(Shigematsu, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2014
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.83, No.1 (2014. 3) ,p.3(3)- 30(30)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20140300-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九世紀マラッカ海峡檳榔嶋史略

――海峡植民地における多民族社会の形成過程――

重松伸司

はじめに

ペナン島は、東南アジア・マラッカ海峡北部の小島である。この島を周回し、あるいは航海途上に遠望した中国人は、「檳榔（ビンロウジ）の生い茂る島」、ポルトガル人やオランダ人は、檳榔樹を「ピナン」と呼んだ。表題の檳榔嶋（びんろうとう）あるいは本文中のペナン（ピナン）は、これらの通称に由来する。この島の一八世紀末～一九世紀末の約一世紀間に、島の北東南隅に港市ジョージタウン市が形成された。本稿はこの小都市における多様なエスニック社会の形成の歴史とその統合の様態を考察する。海港としてのジョージタウンは、多元的なエスニック社会の複合的な構造と性格を持ち、マクロ及びミクロの視点から見て、極めて重要な「コスモス」といえる。その分析視角を示す前に、まず、ペナン島について概観しておきたい。

ペナン島（Pulau Pinang）は、今日、マレーシア北部の一州、ペナン州を形成する。ペナン島の一七世紀以前の史実について、これまでの研究では詳細は不明である。中国の史書に檳榔嶋などの地名や島の外貌の簡略な記述がある。[1] また、ポルトガル、オランダ、フランスなどの遠征記や航海記には、わずかだがこの島への言及が見られる。[2] だが、島の全体像については詳細な記録がなく、生態系や人口、習俗や生活などの断片的な記録が現れるのは、一七世紀以降のことであり、それらはもっぱら西欧海洋帝国のポルトガルやオランダ、その後に到来したフランスやイギリスの植民地支配者の航海記録である。そして、「島史」として公的に記録される内容は、一九

世紀以降の英国による海峡植民地の統治報告書[3]や、更には華人・西欧海洋商人の交易記録である。

ペナン島がこれまで、「東南アジア史」や「海洋アジア史」上、注目を浴びてきたことは、ほとんどなかった。それは、海域アジアの「辺境」に位置し、国際的あるいは局地的（東南アジア及び南アジア）な政治状況にほとんど影響を「及ぼさなかった」とみなす海政学的な評価や、ビンロウジなどの限られた産品しか生産しなかったという国際商品産地としての弱小性、あるいは、中継交易港市としては、比較的小規模・短命であったという歴史的事情にもよる。そして何よりも、「近代アジア世界」や近代の世界市場において、マラッカやその後のシンガポールほどには、強大な経済・政治的意義をもたなかったということであろう。だが、筆者は、この小島の一角を占める小海港が、実は、近代植民都市史や多元エスニック社会史の研究において、重要な意味、モデルを提示し得ると考えている。この点については、一般向けの拙著を参照されたい。[4]

さて、本稿の考察を進める上で、二つの分析視角を提示したい。

まず、第一の視角は、一八世紀末から一九世紀末までの一世紀にわたるジョージタウン市の時系列的な変動である。第二の視角は、時系列的な変動に伴う、ジョージタウン市街における複数のエスニック集団による居住域変動である。前者においては、これまで言及のなかったペナン島の「近代前史」を描き、後者では、世界各地に建設された「ジョージタウン」のうち、東南アジアの旧英領に建設された「ジョージタウン」という一港市の空間的形成の構図を概観する。

第1章　国際港市の誕生―時系列的変化から

ペナン島が歴史の潮流に立ち現れるのは一八世紀後半～一九世紀初頭、英国東インド会社の植民地に組み入れられる過程であった。その一七七〇年から一八一〇年までの四〇年間は、ペナン島近代史の黎明期である。この時期のペナン島とその首都ジョージタウン市には、その後の東南アジア史では、小規模な国際中継交易都市の位置づけが与えられたが、当時東インド会社の支配者は、より壮大な国際戦略都市の役割を構想していた。その背景を以下の「年表」をもとに概観する。

一七七〇年、クダ（ケダ、ケダー）のスルタン王家の

【年表】 ペナン島史略（1780-1910）

	ペナン島	半島・島嶼部	世　　界
1750 1760			1756-63、7年戦争、プラッシーの戦い 1767、アユタヤ朝滅亡、トンブリ朝成立
1770		1770、クダの王家に内乱 1771、ライト、クダに商館設立	
1780	1786.8.10. ライト、スルタン・アブドラーよりペナン租借 1786.8、ポルトガル系ユーラシア人、クダよりペナンへ逃避 1787、クー（辜禮歓）、クダより華人招来；ライト、華人街賦与		1782、タイ・チャクリ王朝成立、クダ侵攻
1790	1790、ライト、スルタン・アブドラーよりペナン割譲 1799、エスニック暴動？ 1799、ペナン「天地会」結成	1795、EIC、ムラカ（マラッカ）占領 （EIC＝East India Company）	
1800	1800、広福宮（寺院）創建 1801、嘉応会館、広東公司、広東公塚創建 1801、インド・イスラームモスク創建 1805、中山會舘、福建公塚創建 1805、ラッフルズ、ペナン着任 1807、アルメニア人、土地・家屋の購入記録 1800-1804、リース総督代理 1807-1810、マカリスタ総督		
1810	1810、「アルメニア人70名」（商館記録） **1814、ペナン大火** 1810's マレー人居住区→インド人街＝「チュリア通り」に 1819、広東連合会館、五福書院創建	1811-16、EIC、ジャワ占領 1819、EIC、シンガポール領有	1813、EICによる東南アジア島嶼部の交易独占権の廃止
1820	1822、恵州會舘創建 1824？アルメニア教会建設（司教通り） 1828、南海會舘創建	1824、シンガポール最初の華人械闘 1826、海峡植民地成立	1821、リゴールのシャム太守、クダ侵攻 1824、英蘭（ロンドン）条約締結（マレー半島＝英領、スマトラ島＝蘭領の分割支配確定）
1830	1838、順徳會舘創建		1834、英国、奴隷制度廃止 1834、契約制度のインド人労働者導入 1837、P＆O、シンガポールに設立
1840	1844、アルメニア人，アンソニー商会創業 1844、大伯公会創設 1849、増龍（増城・竜門）會舘創建 1849、鄭景貴、ペナン到来	1840、英人ジェームズ＝ブルーク、サラワクのラジャに 1848、ペラクに錫鉱山開発、華人クーリー流入	

1850	1852-67、華人秘密結社、械闘頻発	1851、シンガポール、華人カトリック教徒の虐殺 1853、EIC 解散、海峡植民地、インド省の管轄 1854、シンガポール、福建・潮州の対立 1857-63、パハン内乱、シンガポール華人、反政府暴動	
1860	1860's-84、鄭景貴、海山会首領 1860's 辜上達、初代華人太平局紳に 1864、潮州会館創建 **1867. 8. 10. ペナン大暴動** 1867、胡泰興、太平局紳に	1861-73、ラルート錫鉱山、華人秘密結社の械闘 1867、海峡植民地、インド省から分離、植民地省直轄支配 1867、スランゴール内戦	1860、中英北京条約「華僑出国の禁」解除
1870	1870's- 日本人居住？ 1873、新会會舘創建	1873、アチェ戦争-1912 1874、ペラク英国の保護下 1877、清朝、シンガポール領事館設置	
1880	1881、パンジャービー兵、到来 1884、アルメニア人サーキーズ、イースタンホテル（後のE＆O）創業 1886、華人公会（平章会館）創建	1882、清朝「売官条例」公示 1888、英国によるブルネイ、サバ、サラワクの保護領化	
1890	1890「結社禁止条例」公布 1892？ パンジャービー兵舎建設（後のシク寺院）	1891、パハン内乱 1891、シンガポールに日本人共同墓地	
1900	1902、「日本人共同墓地」の記録 1910. 7. 20. 孫文ペナン上陸		

内乱に乗じたフランシス・ライトは、一七七一年にはクダの一角に英国商館を設置した。さらに、一七八六年八月には、英国の保護を求めたクダ藩王スルタン・アブドゥラーから、ペナン島を租借し、植民地化は実質的にはここに始まる。

一七九〇年には、ペナンを割譲させ、この島は東インド会社ベンガル管区の一部に属することになる。以後、プリンス・オブ・ウエールズ島と呼ばれた。その後一八〇五年には、ペナンは東インド会社インド領の一つとして、マドラス・ボンベイ・ベンガルの各管区と同等の植民地として位置づけられた。同時に、ペナンの統治者ダンダス（Dundas）が初代ペナン総督（Governor）に任命される。それまで、東インド会社領ペナンは、ライトをはじめとして、九代にわたって総監（Superintendent）、代理総監（Acting Superintendent）、総督代理（Lieutenant Governor）と呼ばれていたが、彼ら

は実質的には島の行政・法治・交易などすべての権限を握る支配者であった。[5]

第1期　海政的港市の構想時代（一七八〇～一八一〇年）

ペナン割譲の当初から、初代ライトにはこの小島を中継貿易地として運営する意図はなかった。彼は一七九〇年に亡くなるのだが、その遺志は、後の総督代理リース（一八〇〇～一八〇五）、総督マカリスター（一八〇八～一八一〇）に継承された。その遺志とは、一九世紀の国際情勢の変動と大英海洋帝国による支配を見据えた「戦略的海政港市」としてのペナンという壮大な構想であった。両総督が英本国に建議した戦略的な構想とは、次のようであった。

「ペナン開発の東インド会社の意図の一つは、ペナンの戦略的な位置を利して、海軍基地を設立してインド東部海岸を防禦し、（アジアにおいて）ナポレオン戦争の対英勢力（主としてフランス）に対抗すること」であった。[6]その構想実現に向けて、海軍基地とともに造船所の建設が計画された。しかし、この計画は、ペナン現地における物質的・技術的な事情と、英本国の政策変更という政治的理由によって頓挫した。

「（ペナン開発の）目的は、東洋における英国の基幹的な海軍基地建設であった。そのために、島には様々な計画と資金が投入された……だが、職人と建材、木材と熟練工が不足していた。（造船用）木材は、ペナン産と対岸のウエルズリ州産のものでは質が悪く、ビルマのペグー産木材をラングーン経由で入手するには経費がかかりすぎる。その上、鉄製品、銅材、釘など必需品を英国から入手するには、時間がかかりすぎた」。[7]その結果、実質的には計画の遂行は困難であった。その上、政治上の理由としては「トラファルガー海戦の勝利によって、西欧における比肩なき海軍力をもはや確立したと英国政府は考え、（ペナンにおける海軍基地や造船所の建設は）不要という論調が高まり、英国政府の熱意は冷めた。さらに、英国海軍は財政支援を引き揚げ、東インド会社取締役会はインドにおける財政負担と訴訟に苦しみ、ペナン管区政府は計画推進の税源不足に苦しんだ」。[8]このような事情が重なって、結局、ペナンにおける海軍基地と造船所建設による、東洋覇権の一大拠点ペナンという壮大な海政学的戦略構想は潰えた。この構想が実現するのは、実は一八〇五年にペナンに滞在しており、その後、

一八一九年にシンガポールの建設を果たしたラッフルズによってであった。

海軍基地の建設及び東洋の海政学的支配の拠点という目的を失ったペナンは、新たに、インド・中国・インドネシア諸島・アラブとの地域間・民族（エスニック）間の中継交易港市に活路を見出そうとした。軍港から商港への変身である。その具体的な方策は、多様なエスニックの受け入れ政策であった。政策とはいえ、それは必ずしも体系的かつ持続的な内容ではなく、いわば、民族・組織・目的を問わず、到来する集団を無制限に受け入れる「放縦政策」であった。(9)

一八二六年に成立した三港市連合の海峡植民地（Malacca, Singapore, Penang から成る Straits Settlements）を統括する英本国の植民地相、バッキンガム公爵は、海峡植民地総督ウォード宛書簡でこう言明している。「英国政府の海峡植民地の本当の政策は、現地住民の無秩序を統制することではなく、介入しないことである」。この放任・無介入政策は、基本的には、第1期の三〇年間とその後の第2期四〇年間を通じて一貫して変わらなかった。

この時期の英国は、島内及び市街内での移民集団の放任と自由を認めはしたが、二つの要所は固守していた。

その一つは、ペナン島最北東端に構えたコーンウオーリス要塞、もう一つは、その南東に隣接する「居留地」である。

ペナン、マラッカ、シンガポールが独自の海峡植民地（ストレイツ・セトゥルメンツ）として、英本国の直轄支配下に入って以後、イギリスは国際戦略の大転換を図る。すなわち、アジアの資源・物流・情報のネットワークの動脈となるベンガル湾及びマラッカ海峡を扼する点（海港）の確保である。その視点から、ペナンのコーンウオーリス要塞は極めて重要であった。

要塞はラッカ海峡の北中部に位置し、据え付けられた砲台は、西はスマトラ島、北はノース海峡を隔ててタイのプーケット島、東は一・五キロ先の対岸クダを向き、インドネシア、タイ、マレー半島の要衝を抑えている。マラッカ海峡を通過してクダに接近する、英国に対抗する蘭・仏の東インド会社の艦船や商船、あるいは海峡を奔放に往来するブギスなどの現地海賊、そして南下してくるビルマやタイの王国勢力を撃退し、マラッカ海峡に到来するイギリス東インド会社商船の風待ちを防御するには、ペナンの要塞は小規模ではあるが枢要な役割を担

っていたといえる。

その後に置かれたシンガポールとともに、南北の要塞群は建設の時期・位置・戦術は異なるが、ベンガル湾、インド洋、南シナ海の広域海域に対する戦略的ネットワークであり、マラッカ海峡を基軸とする、文字通り点と線の防衛網であった。

【表 1】 ペナン市街の人口分布 1（1788 年）

エスニック集団	人口（総人口に対する％）
Europeans*	19（ 1.60）
Portuguese-Eurasians	197（ 15.30）
Jawi-Pekans/Malays	530（ 41.30）
Chinese	537（ 41.80）
Total	1,283（100.00）

* not incl. Company Servants
（注） Nordin Hussin（2007）, p. 185.

【表 2】 ペナン市街の人口分布 2（1818 年）

エスニック集団	人口（総人口に対する％）
Europeans**	400（ 3.30）
Portuguese-Eurasians	831（ 6.80）
Malays	2,193（ 18.10）
Chinese	3,128（ 25.80）
Chulia & Bengalis（Indians）	5,498（ 45.30）
Arabs	84（ 0.70）
Siamese/Burmese	1（ 0.00）
Total	12,135（100.00）

** incl. Company Servants & Settlers
（注） Nordin Hussin（2007）, p. 189.

第二の「居留地」はどのような意義を持っていたのか。ジョージタウンの「居留地」とは、ライト通りを隔てて、コーンウォーリス要塞の南部に隣接し、南東方向に走る司教通り（Lebuh Bishop）と教会通り（Lebuh Gereja）の二本の街路に過ぎない。いずれも幅約一〇メートル、長さわずか二〇〇メートルの小街区である。この街区には、ペナン総督と数十人の英国人傭兵を除いて、タイから避難してきたフランス人カトリック教徒、アルメニア商人、ポルトガル人およびユーラシア人（ポルトガル人やフランス人とタイ人やマレー人との混血者）であった。

彼ら居住民のペナン島におけるエスニック別の住民構成は以下の通りである。

一七八八年には、西欧人（Europeans）は一九名、全人口一、二八三名のわず

か一％強である。彼らは総督をはじめとする東インド会社社員と兵士であり、そのほとんどがコーンウオーリス要塞とその西に隣接する兵舎に定住していた。その三〇年後の一八一八年、東インド会社関係者を除いて「西欧人（Europeans）」集団は四〇〇人に増加する。彼らは、インド洋からマラッカ海峡を経て、タイ・アチェ・カルカッタでの交易を行う冒険商人の一群であり、上記の「居留地」の二街区に滞留していた。その後英国商人の総数は一八二二年も変わらず、一世紀後の一九三三年には約三倍の一、一七四人に増加するが、華人の一％、インド系の五％ほどであり、総じて、西欧商人のペナン到来は少なかった。

【表3】　ペナン市街の人口分布3（1822年）

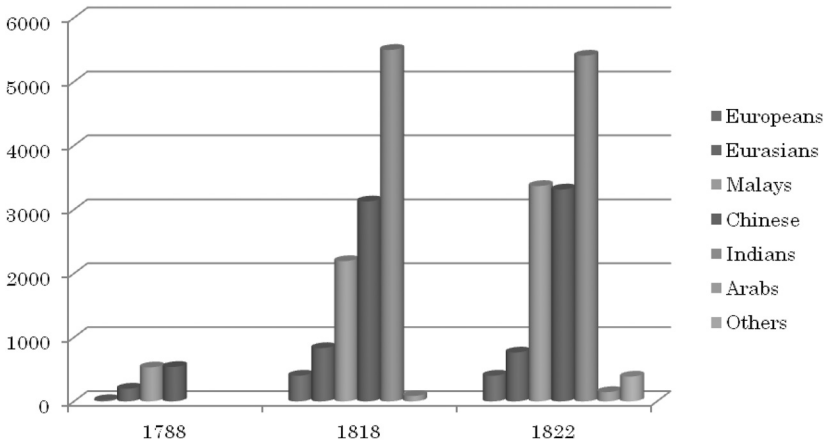
エスニック集団	人口（総人口に対する％）
Europeans**	400（　2.90）
Native Christians	763（　5.50）
Malays	3,367（ 24.40）
Chinese	3,313（ 24.00）
Chulia（Muslim Indians）	4,996（ 36.30）
Bengalis	411（　3.00）
Achinese	60（　0.40）
Bataks	294（　2.10）
Arabs	145（　1.10）
Armenians	16（　0.10）
Persians	11（　0.10）
Caffers（Kafirs）	4（　0.02）
Total	13,781（100.00）

** incl. Company Servants & Settlers
（注）　Nordin Hussin（2007）, p. 190.

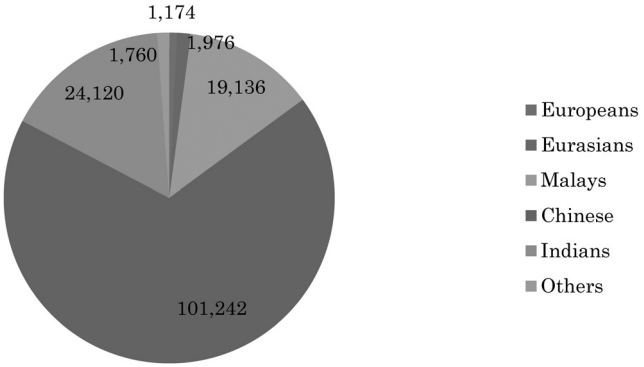
【表4】　ペナン市街の人口分布4（1931年）

エスニック集団	人口（総人口に対する％）
Europeans	1,174（　0.80）
Eurasians	1,976（　1.30）
Malays	19,136（ 12.80）
Chinese	101,242（ 67.70）
Indians	24,120（ 16.20）
Others	1,760（　1.20）
Total	12,135（100.00）

（注）　Penang Past and Present 1786–1963, The City Council of George Town, Penang, 1966, p. 71.



【図 1】 Ethnic-wise Population of Penang, 1788–1822.



【図 2】 Ethnic-wise Population of Penang, 1933.

第2期　移民結集の時代（一八一〇～一八五〇年）

英国東インド会社によるペナンの支配は、この時期に本格化する。ただ、ペナンの「都市経営」は他の英領植民地、例えば、マドラスやカルカッタ、香港や上海、シドニーやパースとは大きく異なる構図を示した。端的にいえば、中継交易関連事業のエスニック別「分益体制」であった。つまり、東南アジア・中国間交易の運営を華人系[10]に、港市建設の基盤整備の労働と治安維持をインド系に、東南アジア・西アジア間の地域圏交易をアルメニア系[11]に、そして、東南アジア・インド・西欧間の国際・広域圏交易を東インド会社及び自由商人に専ら依存した。

一七八七年、ライトはペナン租借の翌年にはすでに華人商人の辜禮歓をクダから招へいし、ジョージタウンの一等地に華人街（Lebuh China）の建設を承認している。その後、第1期、第2期を通じて、相次いで華人系會舘の建設及び華人組織―同郷・同族・寺院・秘密結社―が創設される[12]。以下に主な華人組織の名称と創建年代を示す。

一八〇〇年　広福宮（広東及び福建系）
一八〇一年　嘉応會舘（客家系）、広東暨（＝及び）汀州會舘（福建系）、広東公司、広東公塚
一八〇五年　中山會舘（福建系）、福建公塚
一八一九年　広東連合會舘、五福堂広州會舘、汀州會舘
一八二二年　恵州會舘（海南系）
一八二八年　南海會舘（広東系）
一八三〇年？　台山會舘（広東系）
一八三八年　順徳會舘（広東系）
一八四九年　増龍（増城・龍門）會舘

上記の同郷會舘は、通説にイメージされた緩やかなゲマインシャフト的あるいは自生的・相互扶助的な組織ではなかった。地縁・宗教（道教や仏教的信仰、墓地）・負債（借財と賭博などの散逸）・遊興（アヘンや酒色など）を媒介とする、むしろ半強制的な結合関係によって、クーリー（苦力）、猪仔を組み入れる独特な組織であったといえる。その指導者は、南洋（ナンヤン）商人と総称される広域海洋商人や買弁商人、亡命華人旧官僚層であり、同時に會舘総理、会党首領、公墓総理（管財人）、カピタン（甲必丹）、太平局紳を掌握した華人組織の企業家、そして後には、その多くが慈善団体の長に収まった人物群である[13]。彼らの多くは、すでにいくつかの研究

やドキュメンタリーに詳述されているように、胡椒・アヘン・丁子・檳榔栽培の農園労働、港湾荷役、荷駄引き、雑役、売春などを扱う「事業家」であった。[14]

他方、ペナンのインフラ労働力として、重要な位置を占めたのが、インド系移民集団である。移民集団の性格と役割については、彼らは華人系移民とは大きく異なる。インド系移民の組織の基盤は、基本的にはカーストと宗教である。地縁的組織はあるが、それは概してカースト紐帯と複合し、小規模な村あるいは県レヴェルの結合単位であり、大同団結することはない。[15] しかも、インド本国でもそうだが、彼らは秘密結社的な結合形態と機能をもたない。彼らのペナン移入の経緯を以下に編年的に示す。

一七八六年？　タミル系ムスリム商人と考えられるカーディル・ムハディーン（Cauder Mohuddeen, Kaider Madeen）、ライトに随伴し？、来島

一八〇一年　南インド系ムスリムのモスク建造（一九一六年カピタン・クリン・モスクに改称）

一七八八年　インド政府による七年超懲役囚人の遠島令

一七九〇年　インド人囚人二〇〇名、カルカッタよりペナンに移送開始

一七九四年　インド人囚人一、五〇〇～二、〇〇〇人、ペナンに定住（ライトの報告）

一八一八年　インド系集団チュリア（タミル系ムスリム）及びベンガーリー五、四九八人来住

一八二二年　インド系集団チュリア四、九九六人来住

一八二五年　マラッカ、シンガポールへのインド人囚人移送開始

一八三〇年～　ベンガル管区兵士（セポイ）、マドラス警察隊差遣　～一九一〇年代

一九世紀以前にもインド系集団が来島したが、彼らはおそらく、南インド系ムスリム商人チュリア[16]及び南インド系ヒンドゥー商人クリン及びチェッティ（ヤール）、あるいはベンガル商人や西部インドのグジャラート商人であり、小集団かつ断続的な交易活動であった。本格的かつ組織的な流入が始まる契機は、一七九四年の流刑地

としてのペナンへの囚人遠島である。「英国囚人の流刑先がオーストラリアであるように、インド囚人の流刑先がペナンであった」。一八世紀末から一九世紀を通じて、インド系囚人の役割は、専ら島内の公共施設と主要建築物の建設労働であった。ペナンの要塞、港湾、商館、政庁施設、学校、教会、モニュメント、墓地、道路、用水路とりわけ上水路の建設、建設基材となるレンガの製造は、もっぱら彼らインド系囚人労働力に依存した。

一八一八年、一八二二年の両期の東インド会社ペナン政庁の人口統計には、唐突に五、〇〇〇人規模のインド系集団が記録される。この史料上では、インド系集団の出身地域別・職掌別・エスニック別の内訳と実数は不明である。だが、ペナン政庁の政策から明らかになるが、彼らの大多数はベンガル・マドラス両管区からの徒刑囚、囚人管理と居留地守護の警官・兵士、そして、ベンガル湾海域交易の拡大を目指すインド系商人集団チュリアであった。これらインド系移民は、職掌別に徒刑囚は市街の西南郊、警官・兵士は市内の南部と北部、そしてインド系商人は市内の南東部に定住させられた。とりわけ、南インドからの警官が大量に導入されるのは、華人移民集団間の械闘・抗争が頻発する一八四五年からのことであった。[17]

インド系商人の定住地は、先住していたマレー人の居住区マレー・カンポンに進出していった。その重要な契機となったのは、一八一四年のペナン大火である。ペナンの大火は、少なくとも一七八九年、一八一二年、一八一四年の三度発生している。一八一四年の大火はその中でも最大であるが、チュリア通りとマレー・カンポンの被害が大きく、市街地再編の契機となった。[18] 一八一四年大火のペナン旧市街の再編によって、マレー・カンポンは縮小し、新たにインド人街が拡大・形成された。この街区が第2期、第3期になってさらに拡大し、今日に至るまで、ジョージタウン最大の街区チュリア通りとなる。ただ、一万人規模の南インド系タミル人労働者（タミル語のクーリー）[19]が到来するのは、さらに後の一九世紀後半のことである。

ところで、華人系労働者や頭目が結束する場が會舘であったとすれば、解放囚人や自由移民、契約移民などのインド系移民が蝟集し、結束を固めたのは、サンガであった。サンガ（サンガム）とは、サンスクリット語では、宗教的な結社、特に出家集団による教団組織を言う。だ

が、マレーのインド系移民集団の間では、ムスリムを含めて、一般にはより広く、世俗的・宗教的な様々な社会集団・組織を意味した。そうした集団・組織は、それぞれ固有の集団名を維持しつつ、島内各地に散在したが、一般に考えられるような、「ネットワーク」を形成していない。それぞれが、分断的で孤立化した組織であり、寺院・モスク・家屋・宗教道場などであった。その代表例が南インド系タミル人のカピタン・クリン・モスク、ベンガル系移民のベンガル・モスク、数百を数える南インド系ヒンドゥー寺院、南インド系ヒンドゥー商人チェッティヤールがパトロンの四つのチェッティ寺院、カースト毎の会館、ベンガル湾横断商人の風待ち宿、寺院講、チェッティヤール主宰の頼母子講（クットゥー）、寺院が中核となるタイ・プーサム祭礼講など、有形・無形の結合形態と機能を内包していた。[20] インド系移民にとって、救済・営利・扶助の複合的な機能を持った、こうしたサンガが、砂粒インド系移民個々人を糾合していたと考えられる。

第3期　分裂と統制の時代（一八五〇～一九〇〇年）

年表から明らかなように、第1期、第2期には、相次いで同郷会館と秘密結社が創設された。一八九〇年のペナン政府による「結社取締条例」制定までに、ペナンには少なくとも七つの同郷組織を基盤とする秘密結社が生まれていた。それらは、義興会（広東系）、大伯公会（福建系）、義福会（福建系）、福勝会（福建系?）、海山会、建徳社、連義社である。[21] これらの秘密結社は、第3期に入って、連合と対立を繰り返しつつ、マレー半島各地で激しい械闘（武力を伴う華人宗派間の抗争）と地域にまたがる暴動を展開していた。そうした華人による主要な会党の創設期と械闘・暴動の状況を以下にたどる。

一七九九年　天地会
？　年　義興会（広東系）
一八二〇年　海山会（福建・広東・客家系）
一八四四年　大伯公会（福建客家系）
一八五一年　華人系カトリック教徒の虐殺（シンガポール）
一八五二～六七年　秘密結社間の械闘頻発
一八五四年　福建会党と潮州会党の対立（シンガポール）
一八五七～六三年（パハン）内乱、反政府暴動（シンガポール）
一八六一年　（ペラク州ラルート）錫鉱山労働者、

秘密結社間の械闘

一八六四年　潮州会館

一八六七年　福建会党と広東会党の械闘、ペナン大暴動、（スランゴール）内戦

一八七三年　新会會舘（広東系）

一八七四年　パンコール協約（会党間の紛争調停）

一八九一年　（パハン）内乱

こうした械闘と地域騒擾の対処に迫られたペナン政庁は、第1、2期の放任政策から第3期に入って治安維持策に転じた。それは、以下に見るように、法令の制定と各エスニックの指導者に対する統制化、「名誉職の付与」による懐柔策であった。

一七八七年　カピタン制度の導入

一八六〇年代？　辜上達（辜禮歓曾孫）初代華人太平局紳任命

一八八一年　インド人シク教徒及び英人の警官増強

一八八六年　平章会館（華人公会）（華人組織間の大同連携）

一八九〇年　「結社禁止条例」制定

一八九二年　パンジャービ兵の増強

大商人・会党首領・カピタン・太平局紳という四つの

権限は、多くの場合同一人物が掌握し、植民地政庁と会党とは、一九世紀末までは「相互依存関係」を維持していた。[22] この良好な関係も、一八六七年のペナン大暴動、マレー半島における華人騒乱の頻発を契機に転換を余儀なくされた。ペナン政庁は、一八九〇年に「結社禁止条例」を公布し、「会党」を反社会的な「秘密結社」と規定し、英人・インド系警察・軍隊を投入して抑圧に転じた。放置から法治への転換である。[23] 英国側の懸念は、械闘と秘密結社の跳梁による治安の乱れと税収の減少であり、会党が恐れたのは中国への送還であった。彼らは中国では反社会的勢力として処断されるからである。一八九〇年以降も会館・公所が設立されたが、それらの多くは合法的な体裁を取り、表面上は植民地政府に対して恭順の意を表した。会党と華人労働者の矛先が、同じ華人同朋に向けられている限りにおいては、ペナン政庁は、依然として華人の活動を黙認したのである。しかし、一九一〇年の孫文来馬前後から、華人指導者と苦力の意識が同朋に対してではなく、清朝体制と英国支配に向かって行く。英国植民地政庁は初めて事態の深刻さに気付き、一八九〇年以降、本格的な秩序の導入と制圧に取り組み始めた。大商人や会党の大物たちは、この間、清国の倒

壊か、英国による華人勢力の抑圧か、華人の利権維持か、それらの流動的な情況を慎重に見極めていた。そうした情勢が一九一一年の辛亥革命まで続く。[24]

第2章　国際港市の展開――空間的変容から

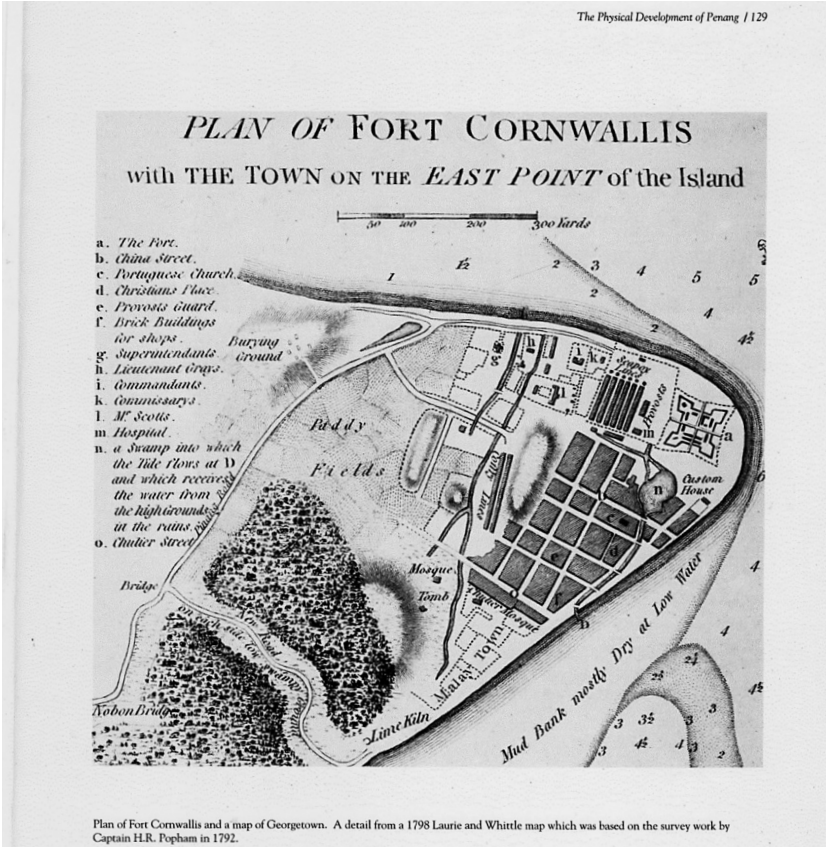
本章は、第1期～第3期のペナン島ジョージタウンにおけるエスニック別居住圏の空間的な変化を考察する。それらの内容は、旧市街の全体図、各市街区域における華人系組織（會舘・寺院・廟・墓廟）、インド系移民集団の居住地域、アルメニア・ポルトガル人居住区、西欧人墓地などであり、筆者が単独で行った一九八五年、二〇〇〇年、二〇〇一年、二〇〇四年、二〇一二年の五次にわたる実地調査（現地調査及び會舘調査）によるものである。

ライトがペナンを割譲させたわずか二年後の一七九二年には、すでにH. R. Pophamによって詳細な測量が行われた。一七九八年には、この測量図をもとに、各エスニックの居住域が形成された。【地図1】

この地図はペナン割譲当初の東インド会社による市域経営の重要な情報を伝えてくれる。一七九八年時点で、東インド会社が直接に管轄した地域のうち、最大域は東西・南北各六〇〇メートル、そのうち周辺部は西側の水田、湿地、南側の森林に囲まれ、実質的な直接統治区域は東西・南北各約四〇〇メートル平方の区域に過ぎなかった。この区域内に、要塞・総監住居・軍営・病院などの行政施設が置かれ、その南には、華人、西欧系（ポルトガル、アルメニア、フランスなどのキリスト教徒住民）、インド系、マレー系の居住域が位置した。重要なことは、西欧人の居住域のすぐ南に隣接して、華人の居住区がおかれたことである。支配の当初からライトが華人勢力に依存する政策を考えていたことが窺われる。

やがて第2期～第3期に至り、急速な開発が進展する。それにつれて、インド系移民集団および華人系會舘組織の増加がみられた。さらに、居住区は市街周辺南部と西部へと展開し、第3期には、約一二キロ平方の新市域に拡大した。基本的には、一七九八年の街区プランが、現在に至るまでの旧市街域の原型となった。【地図2】

街区は、東西のライト通りとペナン街道、南北のペナン通り（海岸通り＝Lebuh Panthaiはその後の埋め立てによる新たな埠頭道路）とチュリア通りに囲まれた九平方キロメートルの区域に、ほぼ条理的な七本の街路が走る。その街路は、北から司教通り（Lebuh Bishop）、教会

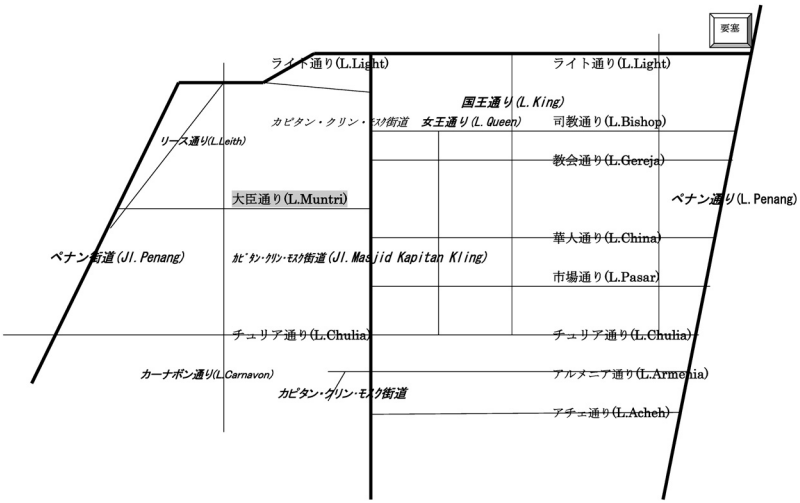


Plan of Fort Cornwallis and a map of Georgetown. A detail from a 1798 Laurie and Whittle map which was based on the survey work by Captain H.R. Popham in 1792.

【地図 1】 1798 年ジョージタウン市街図

通り（Lebuh Gereja）、華人通り（Lebuh China）、市場通り（Lebuh Pasar）、チュリア通り（Lebuh Chulia）、アルメニア通り（Lebuh Armenian）及びアチェ通り（Lebuh Acheh）である。九平方キロメートルの七つの街区には一世紀の間に、英国東インド会社の社員、自由商人をはじめ、華人系、インド系、マレー系、ポルトガル系、ユーラシア系、ユダヤ系、アルメニア系、日系、アラブ系、アチェなど数十のエスニック集団が蝟集した。

この街区における主要なエスニック集団の居住分布の変容を概観する。以下の各時期のタイトルは、第1章とは異なり、空間的な特徴をもとに



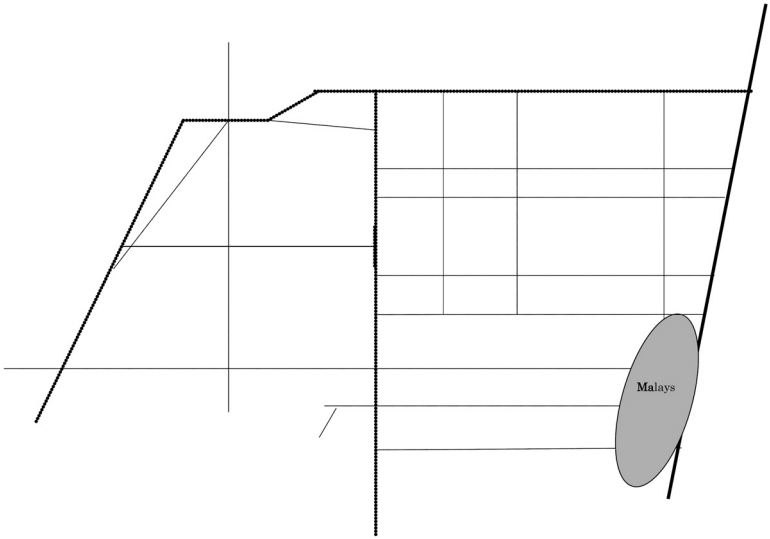
【地図2】 ジョージタウン市街エスニックの空間領域全域1790-1920
―西欧・ユーラシア系・華人系・インド系・マレー・イスラーム系・アラブ系集団―

している。

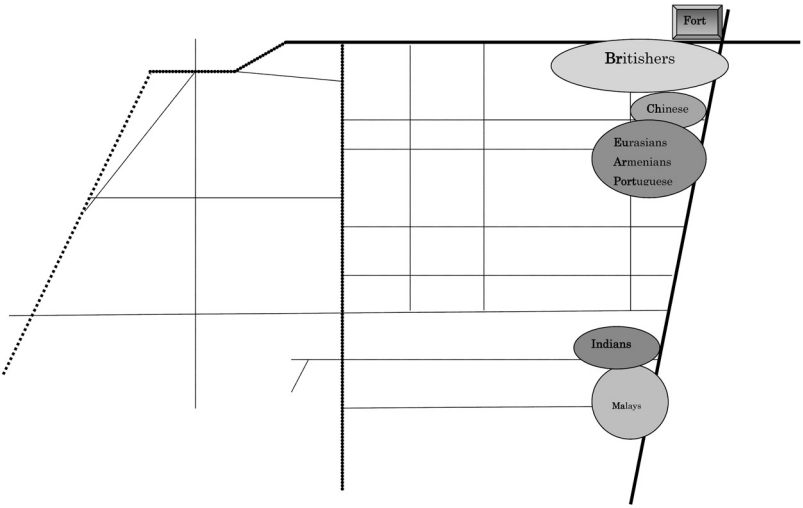
第1期　プレ入植期（～一七九〇年）、
　　居留地形成期（一七九〇～一八一〇年）

一七八〇年以前のペナン島について、その概図・詳細地図は、管見の限りでは不明である。島内ほぼ全域が、ほとんどが人の足跡の入らない熱帯雨林帯であった。ただ、北東部の一角、マラッカ海峡の北部と東部に臨む海浜域には、小規模な漁村のほかに交易の民のマレー・カンポンが点在した。【地図3】それは、伝承によれば、定住村落ではなく、西部スマトラ島やマレー半島から断続的に到来しては、モンスーンの合間に滞在するマレー系・イスラーム商人の仮寓であった。現在の北西部郊外とアチェ通り一帯であり、今日のアチェ通りにはスマトラ島アチェの末裔が居住し、イスラーム様式のアチェ・モスクが彼らのエスニック・アイデンティティの象徴であり、日常の情報空間であった。

島の北東角にコーンウオーリス要塞が建造され、同時に、その南には東西の街道、ライト通りが建設された。更にその南にはライト通りと並行して、東西一〇〇メートルの司教通りと教会通りが形成される。コーンウオー



【地図 3】　ジョージタウン市街エスニック分布の空間
―第 1 期-1（1790 年以前）マレー・イスラーム系集落―©



【地図 4】　ジョージタウン市街エスニック分布の空間
―第 1 期-2（1790-c. 1810）西欧・ユーラシア系・華人系・インド系・マレー系―©

リス要塞、その西に設けられた軍営、そして二つの街区を含む区域が「居留地」であった。司教通りと教会通りには、西欧人が居住し、レンガ・漆喰造りの複層階の商館が建設されたが、その周囲が城壁や堀、石垣などで隔離されてはおらず、他の街区とほぼ同一の規模・様式であった。【地図4】

この街区には、英国のカントリー・トレーダーのほかに、南部タイ、プーケット島あるいはマラッカから逃避してきたカトリック系フランス人とポルトガル人あるいは彼らと現地マレー人との混血者ユーラシア人、そしてごく少数のアルメニア人が集居していた。彼らはこの街区にほぼ二〇年間居住していた。

他方、インド系移民集団は、それまでのマレー・カンポンのあった地域に急速に進出し、新たにインド人街、チュリア通りを形成した。

第2期　華人・インド系移民増大期

（一八一〇～一八二〇年）

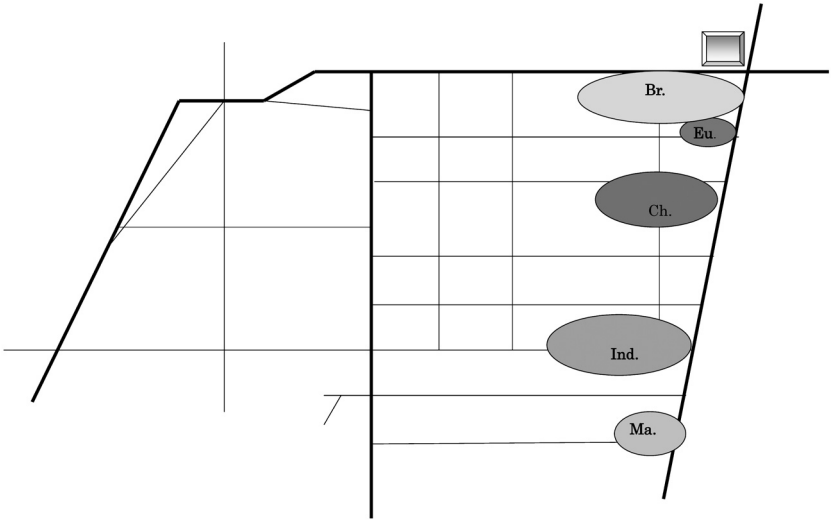
増大する華人系集団は、教会通りの一隅から離れて、その南に隣接する華人通りを占有し、その後は更に、この地区を中心に市街の各地域に華人地区を拡大して行く。彼らの勢力は、市場通りからチュリア通り西部へ、更にアルメニア通りの全地域、そして大臣通りに同郷・同業・同族の組織・会館の拠点を設けるようになった。

マレー・カンポンの一角を占有していたインド系集団は、やがてその北にインド系独自の街区を形成し、次第にチュリア通りを西方に拡大していった。【地図5】

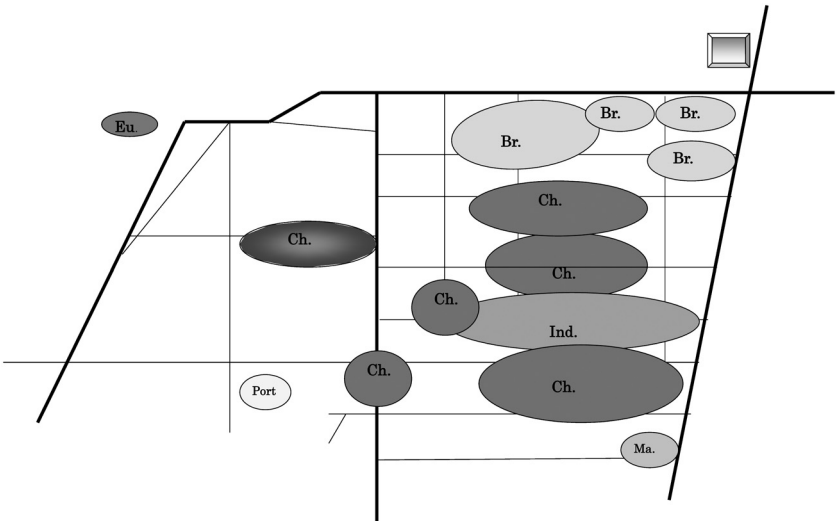
この時期ころから、アルメニア系商人はペナンの司教通りを去り、シンガポールへ交易の拠点を移した。また、ポルトガル系集団は、一部は本国へ、そして他の一部は市街の西南部へ移動した。ユーラシア系集団の足跡は詳細には辿り得ないが、一部はペナン街道の北西端、今日のカトリック墓地の位置する地域に、暫時滞留していたという。【地図6】

第3期　華人隆盛期（一八五〇年～）

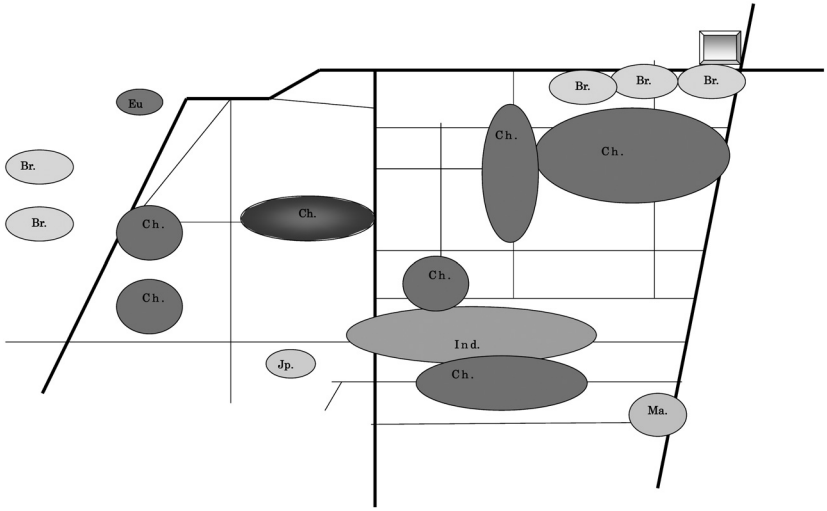
一八五〇年以降は、「居留地」に包摂されるライト通りのペナン政庁地区、司教通り・教会通り東端の交易地区を除いて、カピタン・クリン・モスク街道（旧ピット通り）から海岸に至る全域を包囲する形で、華人諸集団が活動の拠点を確立していた。【地図7】そうした拠点は、同時に帮組織を基盤とする会党・秘密結社の場とも



【地図 5】 ジョージタウン市街エスニック分布の空間
―第 2 期-1（1810-1820）西欧・ユーラシア系・華人系・インド系・アルメニア系集団―©



【地図 6】 ジョージタウン市街エスニック分布の空間
―第 2 期-2（1820-1850）西欧・華人系・インド系集団―©



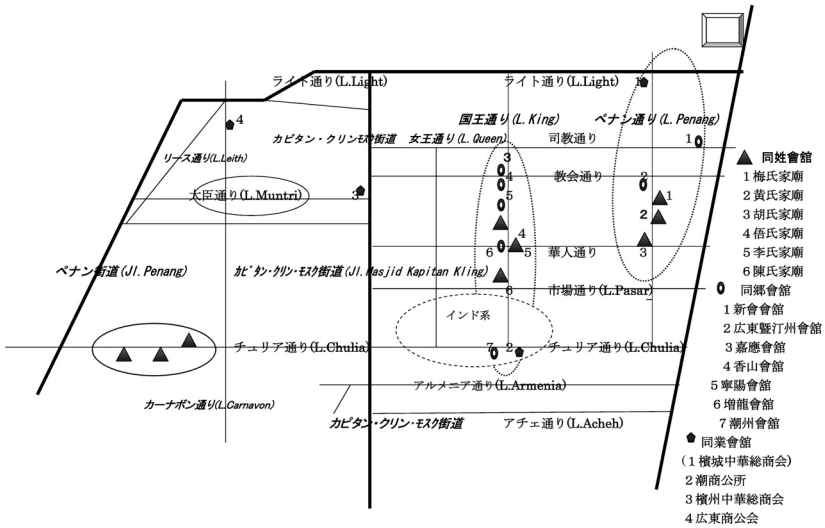
【地図 7】 ジョージタウン市街エスニック分布の空間
―第 3 期（1850-）西欧・華人系・インド系集団―©

なり、ここから械闘が頻発することになった。

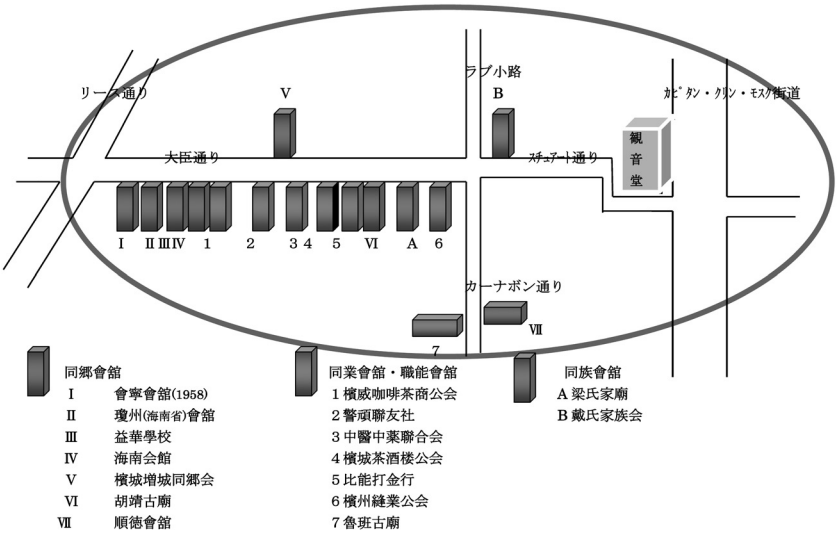
かくして、一八九〇年前後には、ペナン通りと国王通りの南北には、少なくとも六つの主要な同姓・同族会館、七つの同郷會舘、そして四つの同業・親睦会館が創建された。【地図8】とりわけ、カピタン・クリン・モスク街道の観音堂を起点にリース通りに至る、スチュアート通りと大臣通りには、幅五メートルの小路の南北に、同郷、同業・職能、同族の会館が軒を連ねて建造されることになる。【地図9】

ペナン島とその中核都市ジョージタウンは、一九〇〇年以降の一世紀間は、ほぼそれ以前の景観を保っていた。社会的・政治的に概括すれば、華人の秘密結社、会党の紛争と抗争は依然として続いた。だが、インド系・マレー系・華人系の各エスニック間の抗争は発生していない。エスニック間の対立が近代社会の社会病理であるとすれば、なぜこの小島で大規模なエスニック間暴動が発生しなかったのかは、重要な課題であろう。その要因を本稿で解明する紙幅はないが、おそらくは要因の一つは「カピタン制度」から華民保護官制度（Protectorate of Chinese）への移行であろうかと想定している。

シンガポール、ペナン、インドネシアなど東南アジア



【地図8】 ペナン（ジョージタウン）・エスニックの空間（1920-）
—西欧・ユーラシア系・華人系・インド系・マレー＝イスラーム系・アラブ系集団—©



【地図9】 大臣通り（Lebuh Muntri）華人街のコミュニティ分布©

社会における「カピタン」については、その名称・肩書・役割に関する概説はあるが、その制度的構造に関する研究は少ない。[25] カピタンとは、ペナン政庁が導入したマレー・華人・インド系の各エスニック集団の統治者、有力者に与えた「名目的・名誉職的称号」が、一八九〇年代までは各集団内の統合を実質的ににない、かつ集団間の相互けん制と緩やかな「棲み分け」を可能にした。

おわりに

ジョージタウンというおよそ九平方キロメートルの密集地域に、一九世紀初期から一世紀にわたって、多様な社会集団がそれぞれ独自の生活圏と経済機能を生み出してきた。彼らは、出身地・職能・族性を異にする多様な華人系と、出身地・職能・宗教・カーストを異にするインド系、そしてマレー半島及びインドネシアのマレー系やアラブ系、少数集団のポルトガル系やアルメニア系、そしてユーラシア系集団であった。本稿では、こうした諸集団、とりわけ華人系とインド系集団の定住過程について、時系列及び空間域の変動について考察した。

英国交易商人を主とする西欧人は、基本的には少数であり、市域の北東端に位置する「居留地」、後には市域郊外に定住地を構えた。定住とはいえ、一部の西欧人を除いて、彼らは仮寓の集団であり、その意味で西欧僑民であった。それに対して、圧倒的な勢力を持ち、経済と土地と権益を掌握した華人系諸集団は、結果的には大多数が定住し、あるいは定住を余儀なくされた。インド系集団は、その人口、居住地域において華人系に比して弱小ではあったが、基本的には、一衣帯水のベンガル湾を往来して、「居留」と「帰国」を繰り返す「循環居民」であったといえる。そうした三つの相異なる主要なエスニック居民が、緩やかな「棲み分け」を形成していたという事実を本稿では明らかにした。

だが、本稿では考察し得なかった課題が残る。それは、多様なエスニック（言語・宗教・集団属性・職能・習俗）が、多様な利害を持ちつつ、この密集地域において、如何に統合あるいは秩序づけられたかという政治構造と社会メカニズムの問題である。今後、史料をもとに、明らかにしたいと考えている。

注記

本稿は、二〇一一年七月九日ユーラシア文化研究センター（京都大学）の第六六回定例講演会及び二〇一二年

六月二三日に慶應義塾大学三田史学会で行った講演をもとに、華人系・インド系を中心にしたエスニック集団の形成過程をまとめたものである。本稿と並行して、一般向けの著書を執筆していたが、著書では華人・インド系移民のほかに、日系移民やアルメニア人集団についても触れている。また、各集団の活動や歴史背景についても言及してきた。ただ、誤記や誤植が多いことをお詫びしなければならない。

二〇一一年九月一六日～一八日の三日間、ペナン州・ジョージタウンにおいて、「インド洋におけるペナン（PIO＝Penang in Indian Ocean）」と題する国際シンポジウムが開催された。ケンブリッジ大学南アジア研究グループを中心に、マレーシア、タイ、インドネシア、シンガポール、英国、米国、豪州など各国・地域の研究者・ＮＰＯのメンバー約七〇名が参加し、研究報告と討議が行われた。その報告論文集は未刊行であり、詳細な考察は十分に加えることはできなかった。報告の要約集から概観すれば、ペナン及びタイ南部・マレー半島北部・インドネシア諸島にまたがる、マラッカ海峡北域の研究は緒に就いたばかりと考えられる。とりわけ、一八世紀以前のペナン島については、これまでのところ、マレー語やタイ語、あるいはその他の地域言語による記録文書が、必ずしも十分に発掘・考証されていない。また、この島嶼における考古学・民族学、口承・伝承学などの研究も未開拓であり、史実は十分に明らかにされていない。

ペナン島史については、一方では、西欧海洋勢力による、主として交易に関する文献史料と、他方では、明・清代中国の移民関係資料や家廟・族譜関係資料からたどりうる。すでに、我が国の研究者による実地調査や詳細な文献史料考証による、同族・同姓会館誌の研究がある。しかし、もう一方の外来・移民勢力であるインド系集団とりわけ、伝統的な有力商人であるヒンドゥー・チェッティやムスリム・チュリアに関する研究はほとんどない。マレー人の側からの研究はましてやない。今後、こうした研究が深められる必要がある。

最後に、講演の機会を与えていただいた慶応大学文学部の吉原和男教授をはじめ、慶応大学三田史学会の関係者の方々、講演に関する質問やコメントをいただいた先生がた、ペナンの在地研究者、ペナンのＮＰＯ、特にＰＨＴのメンバーには心から感謝したい。

註

（1） 例えば、一四世紀の汪大淵『島夷志略』、一五世紀の『瀛涯勝覧』の記述など。『鄭和航海図』には「梹瑯嶼」と記されている。マレー語では「ポコッ（ク）ピナン」と通称された。一六世紀のポルトガル人船員や商人たちは、「プロ・ピノム（Pulo Pinaom）」（ピナンの島）と呼んでいたという。（Sarnia Hayes Hoyt（1991）, Old Penang, OUP.

（2） 例えば、一六世紀初めのポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸国記』、一六世紀末のオランダ人リンスホーテンによる『東方案内記』など。

（3） 英国東インド会社による「海峡植民地統治報告書」（Straits Settlements Report）など。

（4） 重松伸司（二〇一二）『マラッカ海峡のコスモポリス、ペナン』大学教育出版。

（5） 一七八六～一八一〇年のペナンの歴代統治者とその在位期間及び肩書は、以下のようであった。

Ⅰ．Captain Francis Light（1786–1794）〈Superintendent〉
Ⅱ．Philip Manington（1794–1795）〈Superintendent〉
Ⅲ．Major Forbes Ross Macdonald（1795–1799）〈Superintendent〉
Ⅳ．George Caunter（1795–1799）〈Acting Superintendent〉
Ⅴ．Sir Alexander William Leith（1800–1805）〈Lieutenant Governor〉
Ⅵ．Robert Townsend Farquhar（1804–1805）〈Lieutenant Governor〉
Ⅶ．Philip Dundas（1805–1807）〈Governor〉
Ⅷ．Henry Sheperd Pearson（1807）〈Acting Governor〉
Ⅸ．Colonel Norman Macalister（1808–1810）〈Governor〉

これら統治者の主な墓碑は、現在のジョージタウン市北西部の墓地（Catholic Cemetery of Penang Road）に存在する。統治者の名前は今日もなお、ペナン島内各地の地名・街路名・建築群に残されている。

（6） Mills L. A. “British Malaya 1824–76” JMBRAS., vol. 33, Part 3, 1960, cited from Nordin Hussin, *Trade and Society in the Straits of Melaka, Dutch Melaka and English Penang, 1780–1830.*, NIAS Press（Singapore）, 2007. p. 142.

（7） 同上、p. 142–143.

（8） M. Stubbs Brown “The Failure of Penang as a Naval Base and Shipbuilding Centre” in LMBRAS, vol. 32, part 1, 1959 cited from Nordin Hussin, p. 143.

（9） Turnbull, C. M.（1972）The Straits Settlements 1826–67., Indian Presidency to Crown Colony., p. 9.

（10） Godley. R. Michael（1981）, The Mandarin-capitalists from Nanyang, Overseas Chinese enterprise in the modernization of China 1893–1911. の研究は、この点について詳細に論じている。

（11） アルメニア系商人の東南アジア、東アジアにおける交易活動の研究は少ないが、例えば、以下の著書は、アルメニア系商人の人物像・系譜・主たる交易活動についての詳細な調査資料である。

Wright, Nadia H.（2003）Respected Citizens, The History of Armenians in Singapore and Malaysia., AMASSIA

(Australia).

(12) 呉華著、森川久次郎、今富正巳、谷口房男共訳（一九八一、八二）『マレーシア華人会館史略（一）・（二）』（東洋大学アジア・アフリカ文化研究所「研究年報」第16・17号）。

(13) ペナンで活躍した主要な華人・インド人・アルメニア人・フランス人・英人などに関する略歴と事業を、華語・英語・タミル語・マレー語で簡述した資料、Historical Personalities of Penang.（1986）がある。

(14) 上記のGodleyによる研究のほかに、以下の著書は興味ある視点を提示している。

Tagliacozzo, Eric（2007）Secret Trades, Porous Borders, Smuggling and States along a Southeast Asian Frontier, 1865–1915. NUS Press.

(15) 重松伸司（一九九九）『国際移動の歴史社会学、近代タミル移民研究』第7、8章参照、名古屋大学出版会。

(16) 本稿では詳しく紹介できないが、以下のモノグラフは、ペナンにおけるJawi Peranakanと呼ばれる南インド系ムスリムコミュニティに関する詳細かつ優れた内容である。なお、チュリアとジャウィ・プラナカンとの比定については、これまでの研究では明確ではない。

Fujimoto Helen（1988）The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948., ILCAA., Tokyo Gaikokugo Daigaku.

(17) Turnbull, pp. 88–89.

(18) Nordin Hussin（2007）, pp. 149–154.

(19) 重松（一九九九）第4章参照。

(20) 同上、第8章参照。

(21) 荒井茂夫「マラヤ華僑社会の啓蒙」『三重大学人文論集』第1号、pp. 3–16.

(22) Nordin Hussin, pp. 312–316.

(23) Turnbull, pp. 108–109.

(24) 邱思妮著、陳耀宗訳（二〇一〇）『孫中山在檳榔嶼』Areca Books.

(25) Andaya Watson Barbara and Andaya Y. Leonard（2001）A History of Malaysia., Palgrave. p. 178–181.; Nordin, pp. 245–246.

なお、【年表】、【図1】【図2】、【地図2】~【地図9】は筆者(重松)による作成、【表1】~【表4】は出典資料をもとに筆者が作表。

主な参考文献

上田　信　『中国の歴史、海と帝国』講談社、二〇〇五年。
尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編　『海のアジア2、モンスーン文化圏』岩波書店、二〇〇〇年。
可児弘明・斯波義信・游仲勲編　『華僑・華人事典』弘文堂、二〇〇二年。
小西正捷、弘末雅士他　『インド洋海域世界―人とモノの移動―』葫蘆社、二〇〇八年。
重松伸司　『マドラス物語、海道のインド文化誌』中公新書、一九九三年。

重松伸司　『国際移動の歴史社会学　近代タミル移民研究』名古屋大学出版会、一九九九年。
信夫清三郎　『ラッフルズ伝』平凡社東洋文庫、一九九四年（一九六八年）。
陳徳仁、安井三吉　『孫文と神戸』神戸新聞出版センター、一九八五年。
鶴見良行　『マラッカ物語』時事通信社、一九八一年。
羽田　正　『東インド会社とアジアの海』講談社、二〇〇七年。
浜渦哲雄　『イギリス東インド会社、軍隊・官僚・総督』中央公論新社、二〇〇九年。
弘末雅士　『東南アジアの港市世界』岩波書店、二〇〇四年。
フェル、リチャード・ティラー著、西村幸夫監修、安藤徹哉訳　『古地図にみる東南アジア』学芸出版社、一九九三年。
ホイト、サリーナ・ヘイズ著、西村幸夫監修、栗林久美子、山内奈美子訳　『ペナン、都市の歴史』学芸出版社、一九九六年。
松浦　章　『中国の海商と海賊』山川出版社、二〇〇三年。
桃木至朗編　『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年。
家島彦一　『海が創る文明―インド洋海域世界の歴史―』朝日新聞社、一九九三年。
山下清海　『東南アジアのチャイナタウン』古今書院、一九九二年。
山田憲太郎　『香料の道』中公新書、一九七七年。
アンソニー・リード著、平野秀秋・田中優子訳　『大航海時代の東南アジアⅠ・Ⅱ』法政大学出版会、二〇〇二年。
****
浅田　實　『東インド会社とインド成金』ミネルヴァ書房、二〇〇一年。
荒井茂夫　「マラヤ華僑社会の啓蒙」『人文論叢』三重大学人文学部文化学科研究紀要第1号、一九八四年。
呉華著、森川久次郎・今富正巳・谷口房男訳　『マレーシア華人会館史略（一）（二）』、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』第16号、一九八一年。
リンスホーテン　『東方案内記』岩波大航海時代叢書Ⅷ、一九七三年。
トメ・ピレス　『東方諸国記』岩波大航海叢書Ⅴ、一九七三年。
ロバート・ホーム著、布野修司・安藤正雄監訳、アジア都市建築研究会訳　『植えつけられた都市、英国植民都市の形成』京都大学出版会、二〇〇一年。
****
Andrew Barber, Penang under the East India Company 1786-1858, AB & A, 2009.
Cheo Kim Ban, Baba Wedding, Eastern University Press, 1983.
Michael R. Godley., The Mandarin-capitalists from Nanyang, Overseas Chinese enterprise in the modernization of China 1893-1911., Cambridge University Press, 1981.
R. T. Fell, Early Maps of South-East Asia., Oxford University Press, 1991.

Goh Ban Lee, The Foundation of Urban Planning in George Town and Adelaide, Kajan Malaysia,, 1988.

Haneda Masashi (ed.), Asian Port Cities 1600-1800., NUS Press, 2009.

Sarnia Hayes Hoyt, Old Penang., Oxford University Press, 1991.

Khoo Su Nin, Streets of George Town, Penang, An Illustrated Guide to Penang's City Streets & Historical Attractions., Areca Books, 1993, 2001.（邦訳なし）

Khoo Salma Nasution, Sun Yat Sen in Penang. Areca Books., 2008.

Khoo Salma Nasution & Malcolm Wade, Penang, Postcard Collection 1899-1930., Janus Print & Resources., 2003.

邱思妮著、陳耀宗訳『孫中山在檳榔嶼』Areca Books, 2010年。

Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, A Centenary Volume of Journal of the Royal Asiatic Society, Malaya Branch, 1877-1977. Reprint no. 4., 1977.

Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society., vol. 82, Part 2., 2009.

Malaysian Nature Trails of Penang Island., Malaysian Nature Society, Penang Branch, 1999.

Nordin Hussin, Trade and Society in the Straits of Melaka, Dutch Melaka and English Penang, 1780-1850., NUS. Press, 2007.

Tagliacozzo, Eric, Secret trades, Porous Borders, Smuggling and States along a Southeast Asian Frontier, 1865-1915., NUS Press, 2007.

Tan Kim Hong, The Chinese in Penang, A Pictorial History., Areca Books, 2007.

C. M. Turnbull, A History of Singapore 1819-1988., Oxford University Press, 1999 (2nd. ed.).